

講演会「津波の実像と津波研究」
～3.11 東北地震津波の教訓を踏まえて～

日 時 : 平成 24 年 12 月 10 日 (月) 13 : 00～14 : 30
場 所 : 合同庁舎第 2 号館 共用会議室 2 A
講 師 : 間瀬 肇 教授
京都大学 防災研究所 沿岸災害研究分野

<主な質疑内容>

- 英国の津波の造波装置の概要について教えてください。
→ウォーリングフォードの論文が三年前に出ている。圧縮タンクで波を起こす。
- 計算手法で計算が鈍らない理由を教えてください。
→リーマンの特性曲線法で差分を解くので、流量と運動量が保存されるので、波形が潰れないので、波形のピークが維持される。
- アダプティブメッシュについて、最初に細かいメッシュを仕込んでおいて、差分が大きい時は細かいメッシュ、小さい時は粗いメッシュを使うもの。
→本当は、FEMの方が便利。河川遡上計算に向いている。
- フラップゲートの適用規模はどうでしょうか。
→二段折れのフラップゲートなどにより、浮力の小さい初期でも起動できる工夫をしている。段波状の津波の場合には、実験レベルでは、少し越流するが、追隨できて立ち上がる。
- 二次元の解析は、狭域以外は概ね再現できると考えて良いでしょうか。
→堤防の越流減少による粘り強い構造検討には、三次元検討がある。構造物と津波の関係を解析するには、三次元解析が必要である。
- 陸上の建物には、開口部がない建物は転倒流出している事例が多いということも有るので、フラップゲートをつけることは如何でしょうか。
→検討事例は原子力施設の建屋である。重要施設が対象と考えている。
- 津波後の地形変化を考慮するについて、何か検討されているのでしょうか。スケール感はどう位でしょうか。
→断面レベルの検討ではなく、平面レベルのスケール。地形変化と一緒に計算することは可能であるが、検証が難しい。